

---

colorless

黒鷹鶩産

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

colorless

### 【NZコード】

N4478F

### 【作者名】

黒鷹鷺産

### 【あらすじ】

高校一年生となつた萩原紫苑。夏休みも終わり、新学期が始まると幼馴染である「穂坂桔梗」との再会を果たす。そして、彼女は自分を紫苑の許嫁だと言つた事から物語は始まつていく。

prologue： ハーツイーズ～幸せな考え方（前書き）

正直に申します。  
ギャルゲーみたいな感じですので、悪しからず。

## prologue：ハーツイーズ♪幸せな考え方

「ねえ、紫苑君」

女の子が僕を呼ぶ声が耳に入ってきた。

僕がゆっくりと伏せていた顔をあげると、目の前にはその女の子の顔があつた。

うわっ！？

僕は情けない声をあげ、椅子」と後ろへと倒れた。

「大丈夫？」

だ、大丈夫。

頭は打つたけど。

「ごめんね……」

いや、別にいいんだけど……それより何？

「あ、うん。その……外つてどんな色してるのかな……って思つて色？」

色つてあの、赤とか青とかの色だらうか。

「ほら、こいつて一面真っ白だから」

言われてみて、納得した。

辺りを見渡してみても、こいこは一面白色だけしかない。  
ほかの色なんて一切ないのだ。

「だから」

少し考えてみる。

どんな色をしているのかつて言われても、正直答えにくい。

だって、ここ之外には縁はもぢろん。

僕の知らない色だつてたくさんあるのだから。

だから僕はこうとしか言えなかつた。

いろんな色があるよ。

「いろんな色つて？」

女の子は期待するような眼差しで僕を見てきた。

赤とか、青とか、緑とか…ほかにもいろいろ。

「どれくらいあるの?」

さあ? どれくらいあるんだろう。

「分からないの?」

うん。

「なんだ」

女の子は残念そうな溜息をついた後、独り言のように呟いた。

「一度でいいから、外を見てみたいな」

そう言つたとき、本当に夢を見るかのように彼女の目は遠くのまつを見つめていた。

そうだ。

ねえ。

「うん?」

じゃあ、外に出よ!つぶ。

「え?」

一緒に、外を見に行こうよ。

僕が案内してあげるからさ。

そして、僕はゆっくりと手を差し出した。

## prologue： ハーツイーズ♪ 幸せな考え方（後書き）

まずははじめまして、そしてがんばります。

今回が初めての投稿となるわけです、はい。  
ので、よく分からぬことが多いですが読んでいただければなと思  
います。

指摘などありましたら、遠慮せずに言つてください。  
とこづわけで、どうぞよろしく。

**第一輪： サネカズラ～再会～（前書き）**

さて、本編開始です。

## 第一輪：サネカズラ／再会

夏休みが終わって、今日から新学期である。

そう、今日から一学期なんだ。

それなのに。

「なんだろう。この出席率の悪さは」

クラスに入ってきたときには僕が早く着きすぎたと思ったから特になんとも感じなかつたんだけど。

今から始業式が始まると「うのに、クラスを見渡してみれば……座っているのはわずか十人足らず。

僕の記憶に間違いなければ、このクラスは十数人ではなく確か三十八人はいたはずなんだけど。

多分それは僕の気のせいだろう。

このクラスは十人足らずのクラスだつたと、そう思つておこう。

「まあ、こうなることはある程度は予想してたんだけど……」

隣から聞きなれた声が聞こえた。

「今の心境を例えるならどんな感じ？」

「そうね……ファミレスでコーヒーを頼んだのに持つてこられたのはコーラでしたって感じの気分」

隣で溜息をつく彼女の名前は『九条椿』。

このクラスの学級委員長を務めている。

責任感が強く、比較的真面目で、面倒見がいいため学級委員長には最適な人物というわけだ。

他人の悩みなどは親身になつて考えてくれるため、クラスを問わずよく相談事を持ち込まれるらしい。

それは彼女が誰からも信頼されている証拠なのだろう。

だけど椿が僕に相談していく理由だけは未だによく理解できない。

その辺り、もつといい相談相手がいるだろうに。

成績優秀で、どこか幼さを感じる顔の造形に茶髪の腰辺りまである

ロングヘアの髪。

容姿の可愛らしさとか、その他もうむりのために毎日ラブレターが絶えないとか。

そんな完璧そうに見える彼女だが、欠点……といふかコンプレックスがある。

それは身長。

実は椿、制服を着ていなければ小学校高学年と間違えそうなほど身長が高い。

そのコンプレックスを克服するために牛乳を毎日一本飲んでいると「うの」だが、まったく伸びてない。

指摘したら最後、半殺しは確実。

ふと、隣の椿から視線を感じる。

何かとても重い感じのする視線が。

「何か失礼なことを考えてなかつた?」

「気のせいです」

即答。

そうしないと、僕の命が危うい。

「まあ、いいけど。それより、そろそろ移動しないとね」

「うん? ああ、そうだね」

その後の行動は非常にすばやかつた。

クラスに良く届く声で号令をかけ、全員(十数名だけ)を連れて体育館のほうへ向かつた。

今日は午前中授業なので、始業式さえ終わってしまえば後は特にない。

というわけで、今はクラス活動の時間なんだけど。

クラスの担任の先生は、「この先生にとっての地獄絵図のような光景は何だ」といった。

「うん、解らなくもない。

「今日来てない奴らは明日は外周十周でもしてもううか

メモ用紙を取り出して、ペンで書いていることから恐るべくない奴の名前を書いているのだろう。

「で、だ」

先生は一息入れてから話す。

「お前たちに新しく一人の仲間が加わるぞ、喜べ」

そういわれたとき、当然のことと教室内は十数人（僕を除く）の声で騒然とした。

「ほら、静かにしろ。というわけで、入っててくれ」

そして、教室のドアが開く。

そこから入ってきたのはびっくりするほど綺麗な少女だった。

肩より少し長めのセミロングの黒髪。

お世辞抜きで「美人」という言葉を使うことのできるほど綺麗に整えられた顔立ち。

透き通った大きな瞳。

その少女は制服だといふのにどこか大人のような雰囲気を放っていた。

しかし、何故だろう。

初めてあつたような感じがしない。

先生の隣に立ち、ゆっくりと僕たち全員に挨拶をする。

「初めまして。私は『穂坂桔梗』<sup>ほさかききょう</sup>と言います」

穂坂……桔梗……穂坂？

「あつ」

そのとき僕は思い出した。

昔、一緒に遊んでいた女の子の存在を。

「九年前からアメリカのほうへ行つてました。分からぬことが多いので困っているときには助けてもらえるとありがたいです」

「もちろん助けるさ！」とクラスから熱狂の声が飛んだ。

ふと僕の目は目の前に悠然と立つ少女……穂坂桔梗の目とばっかり合つた。

そのとき、彼女は嬉しそうに微笑んで。

「そして、ただいま。紫苑君」  
そう言った。

クラスはしばし静寂に包まれ、その後、驚愕の絶叫が響き渡った。

## 第一輪： サネカズラ～再会～（後書き）

といふわけで、第一話です。

まあなんといいますか、自分の文章能力のなさには驚かされます。  
いろいろ間違つていてたり、おかしかつたりすると思つので違和感を  
感じたら、指摘をお願いいたします。

こんなものでも読んでいただけてありがとうございます。

## サネカズラ～再会～ その一

「あのぉ、質問いいですか？」

クラスメイト（男）が手を上げる。

「あ、はい何でしょう？」

「紫苑とはどういったご関係でしょうか？」

「え、か、関係ですか……」

関係も何も、ただ子供の頃親しかった……要は幼馴染つて奴なだけなんだけど。

桔梗（昔と同じ呼び方でかまわないだろう）のほうを見てみると、何故か俯いていた。

はて、答えは単純明快。

「幼馴染」の一言で万事解決だと思つただけ。

「あの……」

桔梗は僕のほうを見ると、申し訳なさそうに「言つてもよろしい」のでしょ？と尋ねてきた。

何で僕の許可を取るのか疑問には思つたものの、たいして問題ないだろうと思つた僕はそれに頷く。

すると桔梗は深呼吸をしてから「私は……」と答えだす。

「私は……紫苑君の……」

クラス中が静まり返り、桔梗の答えを聞くために耳に神経を集中させている。

「その…………い」

ん、「い」？

「お、じゃなくて、「い」？」

「許嫁です！」

あれ？

おかしいな……どうしてだろう。

「許嫁」って聞こえた気がするんだけど……こ、いやそんなはずは

ない。

大体、現代で「許嫁」なんて単語は漫画やアニメの世界でしか聞いたことがない。

そうだ。

僕の脳が勝手に桔梗の言葉を「幼馴染」から「許嫁」と言ひ言葉に変換したに違いない。

うん。

僕の脳にも困つたものだ。

ふと気付く、クラス中からの視線。

何でだろう。

みんなのその視線からは負の感情しか伝わってこないよ？

しばしの沈黙が流れ、突如みんな席を立ちだした。

どうしたのだろうと見てみると、何故かみんな僕のほうに歩み寄つてきた。

そして。

「し」

「し？」

「死にさらせええええええええええ！」

クラス全員からリンクに遭う中で僕の意識は次第に薄れていった。

目が覚めると、そこはなにやら不思議な花畠だった。

白い霧が当たり一面に拡散していて、遠くのほうはまつたく見えない。

足元を見回すと、名前も分からぬ黄色い花が僕の足元に無数に生い茂っていた。

ここはどこなのだろうか。

辺りを見回しても、遠くのほうは見えないためよく分からぬ。

それでも、僕はさつきまで学校に居たはずなんだけどな……

どうしていきなりこんなところにいるのだろう。

ああ、そうか。

今までのが夢だつたのか。  
なるほど。

「……」

え？

何かが聞こえた気がした。

「……か……な……で」

あ、もう少しで聞こえそうだ。

「か……きて」

ああ、あと少し。

「「戻ってきて…」」

「うわっ！？」

ああ、鼓膜が破れるかと思った。  
ん、あれ？

僕の目の前にある桔梗と椿の顔。

「あれ、僕は一体……」

なんか体中いろいろと痛むのは僕の氣のせいなのかな。  
さつき見てたのが夢だとしたら、リンチにあつてる筈もないんだけど。

辺りを見回せば、そこには僕の見知った顔のクラスメイトたち（十  
数名）がいる。

「う、ううう……」

今にも泣きそうな顔の桔梗が僕に抱きついてきたのには驚いたけど、  
おかげでこっちが現実なんだという実感ができた。

「本当に良かつたです……本当に」

「まったくだわ。心配掛けさせて」

椿も何かホッと安心したような表情を浮かべている。

ああ、やっぱりこっちが現実で良いんだ。

「いや、危なかつた。危うく人一人を死なせるところだつた」  
周りの何処からかそんな声が聞こえたのは、僕の聞き間違いだと信じたい。

「お前ら、そろそろ終わるぞお」

椅子に座つて読書していた先生が立つたと同時にチャイムの音が響いた。

「さて、もうめんどいから終礼も一緒にするぞ。連絡のある奴はないな。じゃあ、終わるぞ」

「起立、礼」

「『ありがとうございます』ました」

これで今日の学校は終わりだ。

## サネカズラへ再会／その一（後書き）

まあ、かなり遅れての一話目です。

本当、こんなものでも見ていただけていたなら嬉しいですね。  
サブタイをどうしようか考えたんですが、日にちが変わらない場合は「その一」「その二」とかするんによろしく。  
相変わらず、指摘などをお願いします

## サネカズラ～再会～ その三

「なあ、紫苑。俺個人の意見として穂坂嬢に校内を案内して差し上げたらいかがだろう？」

「……どこから湧いて出たんだよ」

終礼後、帰り支度をする（といつても、筆箱を学校指定のスポーツバッグに入れるだけなんだけど）僕の前に突如湧いて出てきたことは『森もり』。

「失礼な奴だな。人をお化けみたいに言ひものではないぞ？」

いや、まさしくそんな感じだろう。

お前はいつどこから出でてくるのか分からんからな。

棗は校内で付き合いが一番長く、幼稚園の頃からだからもう十年ぐらいだろうか。

一見するとスレンダーな体つきをしているが、中身は意外と筋肉質。成績は校内で中間ぐらいに位置しているが、運動神経は抜群にいい。髪は首根のところ以外にはワックスをつけてしっかりと整えていて、顔つきは僕と違つてかなり男らしい。

高身長だし、ルックスもいいから女子からの人気は高いと言う話も聞いたことがあるな。

友達思いのいい奴で、気兼ねなく相談できる相手はと仮に聞かれたのならば、僕は間違いなく棗と答えるだろう。

で、棗には一歳年下の彼女がいていつか紹介する機会があるだろう。

「それより、早く交渉してみてはどうだ？」

「まあ、別にいいけど……お~い、桔梗」

僕が桔梗を呼んだ瞬間、クラスに残っている男子全員の鋭い視線が僕のほうを向く。

うう、視線が痛い。

僕は何もしていないというのに。

「なんでしょう？」

「つちに来ると同時に、桔梗は僕に尋ねた。

「あ、その前に紹介しとくよ」

「森棗です。よろしくお願ひします穂坂嬢」

「え、ええっと……穂坂桔梗といいます。よろしくお願ひします」

馬鹿丁寧にお辞儀をして言つ必要はないと思つのだけれど。

「それで、校内を案内しようと思うんだけど……時間は大丈夫?」

「え、校内ですか?」

「ああ、それはいい考えね」

「一体いつからそこにいたのでしょうか、椿さん。

なんですか、最近は突如湧き出ることが主流と言つわけですか。

「そう……ですね。では、すみませんがお願ひできますか?」

そんな僕の口の声を無視するように会話は進んでいった。

みなさん気にしてないようであるで、僕がおかしいみたいじゃないか。

「では、穂坂嬢。リクエストはござりますか?」

氣取った様な言い方で、棗がそう聞くと桔梗は少し戸惑つて「職員室をお願いします」と先ほどより少し小さめの声で言つた。

まあ、棗の女性への呼称は独特だから違和感があつたのだろう。

棗が「嬢」を付けないのは姉と彼女ぐらいなものだからな。

この学校のつくりとこりものはいたって単純。

校舎は主に一つあり、一つは当然ながら一年から三年までが学年毎に昇順で並んだ教室棟。

そして職員室や、美術室、図書室といった特別教室の集まる特別棟（僕達は職員棟と呼んでいる）である。

教室棟はどの学年もA～Hクラスまで存在する。

教室棟と職員棟を結んでいるのが連絡棟と呼ばれるものであり、これらはどの学年もBクラスとGクラスから伸びている。  
構造的にはなんら難しいところはない。

入学してきた僕達どの教室がここにあるということを十日経たな

いうちに把握できるのだから。

というわけで、まず桔梗に案内しているのが職員室である。

職員室は職員棟二階にあり、職員室を向いて右側に印刷室とパソコン室。

左側には保健室と補習室（定期テストで赤点を取つた者のみが入れる神聖な教室だ）がある。

「つてことなんだけど、分かつた？」

「はい。意外と簡単な造りなんですね」

「まあ、単純構造がこの学校の魅力の一つでもあるからな」と棗。学校側としてはそんなところに魅力を感じてほしくないだろう。「うう」と、そのとき、職員室の入り口のドアがスライドし、クラスの担任が出てきた。

「お前らどうしたんだつと……なるほど」

僕、棗、椿の姿の他にもう一人の桔梗の姿を見つけ、今の状況を納得したらしい。

「まあ、この学校は単純構造だからすぐ覚えるさ。頑張れよ」それだけいうと、先生は鼻歌を歌いながら行ってしまった。

「どうやら、先生たちにとつても単純構造が魅力なようだ。

「それで、この上が芸術関係の教室。教室の方向を向いて右から音楽室、美術室、書道室、家庭科室になっているわ」

丁寧に桔梗に教室の位置を教えていく椿を見て、少し感心する。ここまでこの学校の教室の位置を丁寧に説明するのは校内を探しても椿ぐらいだろう。

「そして下の階は、同じく教室の方向を見て右から生物室、科学室、物理室」

「とても分かりやすいです」と、桔梗。

それが椿の教え方なのか、学校の構造がなのがどうなのだろうと思つたが、恐らく両方だろう。

「で、購買は教室棟と職員棟の中庭にあるから」

「はい、しっかりと覚えました」

「……までの所要時間五分足りず、……実際に速い」と。

靴を履き替え、校門前までやってきた。

椿とは変える方向が逆なので必然的に「……」で終わらなければならぬことになると、

「じゃ、また明日ね」

「はい、本日はありがとうございました」

「そんなの当然だよ」

椿は気恥ずかしかったのか照れくしゃみにほにかんで、やがて手を上げて「じゃあね」と言つと行つてしまつた。

「じゃ、僕たちも帰るつか

「はい」

「そうだな」

僕、桔梗、棗の三人は歩き出した。

「その、今日は本当にありがとうございました」

しばらく歩いて、桔梗がそう言つた。

「別に礼を言われるほどのことじゃないよ」

「いえ、それでも今日は紫苑君にも、椿さんにも、森君にもお世話をになりましたし」

「紫苑の言つとおりですよ。お礼を言わることではありますん」

「それでも、言つておきたかったんです」

そう笑顔を浮かべて言つ桔梗の顔は本当に嬉しそうだった。  
その後は他愛のない話をして、それから個々の家に帰つた。  
家に帰り、布団に入つて僕は今日一日を思い返す。

桔梗と再会したこと……それをとても嬉しいと感じた。

そう、嬉しかった。

でも、それと同時に僕は……心が痛むのも感じていた。

## サネカズラへ再会へ そのIII（後書き）

即席ですので、このことをおかしことにひが合ひたのではと思いま  
す。

毎度の如く、指摘お願いいたします。

正直、受験生何で時間があまり裂けないんですねよw

それでも、勉強と平行してやっていくんでしょうね。

第一輪： あぶら～出雲～（前書き）

少し、短めです。

## 第一輪：きぶしー出会い

「……終わった……」

風が吹き、木々が僕を嘲笑つてい。

時間は昼休み、場所は購買前。

そこで僕は一人落ち込んでいた。

落ち込んでいるからと黙つて何が起こるといつわけでもないことは重々分かつてはいる。

だが、僕のこの空虚な胃袋をどうすればいいのか、いや、どうもできぬ。

ちなみに、どうして僕がここにいるのかといふことにひいて皆さんは想像がつくのではないか。

そう、僕は今日弁当がない。

弁当自体はあるにはあるのだが……メインとなる中身が存在しない箱だけの存在だ。

朝持つてくるとき、なんか無駄に軽いなあと思いついたのだがサンドイツチだろうと勝手に解釈したのが間違いだつた。

四時間目が終わり、やつた昼飯だと思い弁当箱を開ける。そして見てみると中身がない。

初めは中身が透明である人類最先端の素材でも入つているものかと箸で中をつづくが、底に箸が当たる音がするだけで何もない。

目を閉じて、自分の頬を抓り、痛いことを感じてまた目を開けてみた。

それでもやっぱり、中身はない。

そのときの絶望感。

昼休み時間は既に五分過ぎており、購買のパン競争には出遅れている。

望みは薄いのを知つてゐるが、それでもなにか残ることを期待していくしかなかつた。

そして乱闘になりかけつつある購買の前へとやつてきたが、割り込むことができずに敗北した。

そして、現在に至るといつわけだ。

「……はあ

軽い嘆息を吐いたとき、ふと後ろから制服を引つ張られているのに気が付いた。

後ろを振り返つてみると、そこには……一人の女の子がいた。

髪の色が金髪であること、瞳の色も髪と同じく金色であることから恐らくは外人であろう。

身長は椿と同じぐらいか。

長く伸びた髪はかわいらしい白リボンで留めている。

顔の造形は椿に近いものの、椿よりもさらに幼い印象を受ける。

……どう見ても高校生には見えませんが。

その子は僕を見上げたままピクリとも動かない。

なんか睨めっこをしているみたいだ。

この状況、周りから見たらど映つてているのだろうか。

「……ええっと

僕がそう口を開くと、その子は小さい体をビクッとした。

なんか小動物つて感じがして、可愛らしい。

「どうしたの？」

尋ねてみて思つた。

果たして日本語は通じるのだろうかと。

もし通じなかつた場合、英語で話さなければならぬのだろうか、いやそれはできないぞと。

そんな心配とは裏腹に、その子は左手に持つていた袋を僕に差し出す。

これは……

「パン？」

「……（＼＼＼＼＼）」

その子は無言のまま頷く。

どうやら、日本語は分かるようだ。

それはひじょうにありがたいのだが、はて僕に袋をいつたいどうしるところのだろう。

僕にこの中のパンをくれるとこうのだろうか。

いや、まさか、それはないだろう。

この子と僕は完全に初対面で、何の接点もなく、見たことすらなかつたのだ。

そんな完全な赤の他人たる僕にパンをくれるなんてあるわけがない。どうせ、フェイントでした。

そんなオチに決まっているのだが、それでも一応「くれるの?」的な確認を取るのが筋だろう。

「これを、くれるの?」

さあ、来い。

「……(じへじへ)」「

またも無言で頷いた。

ほら見……あれ?

「え、本当に?」「

「……(じへじへ)」「

い、いや、まだだ。

まだ油断するな、萩原紫苑。

まだフェイントでしたという可能性が消えたわけではないぞ。

「僕にくれるの?」

「……(じへじへ)」「

「本当に?」「

「……(じへじへ)」「

どうやら、この子は本当に僕に袋の中身をくれるようだ。ええっと、じゃあ、もらつたほうがいいのかな。

「じゃあ、ありがたくもらうけど、君の分はあるの?」「

「……(じへじへ)」「

先ほどよつも少し遅く頷いた。

ひょっとしてないんじゃないだろ？がとこつ飯がした。  
なら、こつすればいい。

「そつか。でも、さすがに全部もりひのは気が引けるし、一緒に食  
べようよ」

その子は驚いたような表情を浮かべて、右手の人差し指で自分を指  
した。

「そつか、君」

「……………（くくくく）」

少し考えたのだろう。

頷くのは先ほどより時間がかかった。

「じゃ、そこにあるベンチで」

僕はすぐ近くにあつたベンチを指して言い、そこへ向かった。

## 第一回： あぶらへ出でる（後書き）

ところで、第一回（実質五話目）です。  
今回もまた前回同様あまり自分で見直したりしてないので、修正点  
とか指摘をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4478f/>

---

colorless

2010年12月10日20時34分発行